



TITLE:

<雑録>石炭の専賈

AUTHOR(S):

荒木, 敏一

CITATION:

荒木, 敏一. <雑録>石炭の専賈. 東洋史研究 1941, 6(5): 351-351

ISSUE DATE:

1941-11-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145752>

RIGHT:

① 註

宋史 卷一 食貨志 上 農田

②

資治通鑑 卷二 後晉天福六年十一月之條に「唐主性節儉。

（中略）分遣使者按行民田。以肥瘠。定其稅。民間稱其平允。」と見え、同書 卷二 後周顯德冬十月。詔。左散騎常侍

須城艾穎等三十四人。分行諸州。均定田租。」と見ゆ。均

稅のことは同書 卷七 後唐明宗長興二年六月丙子「命諸道均民田稅。」と見ゆ。

③ ④

神戶正雄「租稅論」改造社經濟學全集第二十一卷第二二六頁
清水泰次東洋中世史第四篇四〇三頁

石炭の專賣

支那の石炭は古來、煤石、焦石、煤炭、（石）墨等とも呼ばれ、隨分古くから支那の史籍に現はれてゐる。顧炎武は日知錄卷三十一「石炭の條に於てすでに史記、漢書、水經注等に石炭に關する記載ある事を述べ、且つ「墨」と「煤」との異同に就いて考證するなど興味深い一篇を草してゐる。また石炭の採掘法、利用法等に就ては本草綱目に詳細なる説明を見出す事が出来る。外國人で支那の石炭に多大の關心を拂つた者には東に我が入唐求法僧圓仁があり、西にヴェニスの人マルコポーロがある。ところで、この石炭が宋代に於て始めて專賣品として課稅せられた様で、即ち續資治通鑑長編卷七二に眞宗の頃并州（山西）に於て人民の石炭を鬻ぐ者より每駄十斤を抽解した事を記し、宋史卷二八四陳堯佐傳に彼が河東路に官たりし時、その地方の住民が石炭をもつて煖をとる事あるを以て、稅を除去せんことを奏上せる由を記し、また長編卷一一一仁宗明道元年九月己丑の條には「廢眞定府石炭務」と見えてゐる。唐代では未だ課稅專賣の事はなかつた様であるが、昔は殆ど利用されなかつた石炭も唐頃炊爨用として、山西あたりでは廣く一般に利用されてゐた事は、圓仁が彼の紀行に「遠諸州人。盡來取燒。修理飯食。極有火勢」と述べ、また宋代では陸運の老學庵筆記に「北方多石炭。南方多木炭。」と記して居り、宋會要食貨「密務」によれば、石炭が密業に於て木炭と併用せられ、一般に每秤六十文程度で取引されたらしく、また長編卷一〇六によれば、造船業の鐵の烹鍊にも利用された様であるから、唐宋の頃燃料として頗る珍重せられ、その需要が頗る増加する様になつてこゝに專賣制度實行の可能性が生じたのであらう。（荒木）

⑤ 陶希聖氏、「北宋幾個大思想家的井田論」 食貨半月刊 二卷六期

⑥ 長編拾補 卷二八 大觀三年六月壬午臣僚上言。伏以方田之制。即周官土均之法也。辨五物九等。制天下之地征。（宋會要

略同）

周禮に「土均。掌平土地之政」又「大司徒。以土均之法。

辨五物九等。制天下之地征」見ゆ。

⑦

黃宗羲明夷待訪錄田制三に「今丈量天下田土。其上者。依

方田之法。二百四十步爲一畝。中者以四百八十步爲一畝。

下者以七百二十步爲一畝。再酌之於三百六十步爲畝。分之五等。云々」